

## 第五期第 8 卷

この巻の前半は医界の同人の書簡であり、あるいは医学を論じ、あるいは養生を論じ、あるいは医学の学習法を論じ、あるいは医学教育の方法を論じる。後半は医界の同人の書簡であるが、いずれも本書中の諸方を用い、あるものは原方にやや加減して諸病を治癒せしめて書簡を寄こして報告している。あるものは各地方の医学雑誌に投稿して報告している。

### ◆ りくふしょう陸普笙おくに書簡を致る

普笙先生道鑑

魚孚溪は諸々の著作で、広範な領域を明確にし、拝読すると常に深い感銘を受けます。残念なことに遠方すぎて直接お会いして話すことができません。最近の《紹興医報》に収載の「生命を慎重にする論」を読むと、数千言の立派な長論文で、西洋医学の弊害を一つひとつ指弾し、まさに非常に温和で真に燃犀、光徹牛渚〔東晋の温嶠おんきょうが犀の角を燃して牛渚磯ぎゅうしよきの深淵を照らして怪物を見たという「晋書 温嶠伝」の故事から物を鋭く見抜くこと〕のごときです。論中では同志を募り、医界で中西医学に通じているものを一人ひとり挙げて、私の名も列せられております。私は才が凡庸で、中西医学に通暁できていませんが、先生の論を読んで、拍手喝采いたしております。西洋医学では実験を重視するというのが、人体の血液を調べることはできても、人体の気を調べることはできないので、貧血治療の薬はあっても、貧気治療の薬はありません。人体では気血のいずれも重要で、気はとりわけ生命の根本ですから、血と比較してさらに重要です。西洋医学には貧気の薬がないので、ひとた

び気分虚陥の証に遭遇すると為す術がなく、これはもとより西洋医学の重大な欠陥です。さらに内傷病治療に限らず、西洋医学が長じる外科でも、大量の補気薬を使わなければ治癒しない瘡瘍については、西洋医学ではやはり打つ手はありません。奉天高等師範学校書記の張紀三は瘡病で間違った服薬をしたために、下腹部が腫れて痛み、その後5カ所に瘻孔ができて排尿時にはすべての瘻孔から尿が出た。西洋人の医師は切開し縫合して、大きな手術をすべきという。しかし、手術をするには、まず同意書を書かねばならず、事故が起きない保証はなかった。そのためにまだあえてすぐに治療しなかった。数日経つと、睾丸も腫れて崩れて爛れ、睾丸が露出したので、ついに当院にかつぎ込まれてきた。そこでこれを説明して「この瘡は潰瘍糜爛が深く、周囲に波及しており、外用薬にたよれない。そのうえ下焦は元気の所在部位なので安易に切開できない。しかし、切開しなくても気血を補助する薬物を多服して少々化癍解毒の品で助けて、気血を壮旺にすれば、自ずと体内から生肌〔潰瘍部位の癒合を促進する〕し、膿汁を体外に排出して、瘻孔はすべて癒え、小便は正常に尿道から出る」といい、生黄耆、天花粉各1両、金銀花、乳香、没薬、甘草各3錢を処方した。煎じて24剤連服すると、潰瘍糜爛した瘻孔はすべて体内から生肌し、膿汁が体外に排出し、かさぶたを残してすっかり癒えた。この証では全過程を通じて外用薬を用いていない。このようにすみやかに生肌したのは、すべて黄耆の補気作用による。西洋医は貧気を治療する薬がないために、こうした証には切開縫合せざるを得ず、安易に危険な手術を行う。また西洋医は癲狂〔気が狂う〕、瘵攣、癲癩〔てんかん〕、神昏〔意識障害〕などの証はいずれも脳髓神経〔中枢神経〕病とするが、薬を用いてその神経を麻酔したり、調補しても、治癒させることは少ない。奉天の道尹〔道の長官〕である林布都の哲嗣鳳巢が癲狂証を患い、大連にある日本の病院で年余にわたって治療した。日本の医師は西洋医学で毎日纈草（中薬の甘松）チンキを、神経を調養する妙品といったが、結局はまったく効かなかった。その後、奉天に来て当院を受診した。診ると頑痰が過度に盛んで、心と脳をつ

なぐルートに充塞して、神明〔意識〕を阻害していると知った。大承気湯に生代赭石1両半を加えて煎じた湯で、甘遂細末1銭半を服用させると痰涎を若干降下した。その後3日間ごとに1回、全部で4回服用するとすっかり癒えた。また息子の蔭潮が都から寄こした手紙によると、40歳余りの陸軍書記官・王竹孫が毎晩8時を過ぎると人事不省となり、四肢を細かく痙攣させて、非常に灯火を恐れた。軍医が神経の鎮安薬で治療しても効果がなかった。その後、蔭潮が鉄さび、生地黄各6銭を煎じた湯で人参の小塊3銭を服用させ、約20剤を服用すると病はケロリと癒えた。この証は胸中の大気（すなわち宗気）に虚損があるために、上達して脳神経を制御し、神明を統括できなくなり、意識が昏愼して、さらにひきつけを起こした。夜間に症状が起きるのは、この時刻になると身体の気化が下降し、大気に虚があると益々虚すからである。灯火を恐れるのは、肝血が虚して熱を生じると、肝中に寄寓する相火がこれに乗じて脳を上擾し、脳は煩熱に苦しみ、灯火を見るのを恐れる。そこで人参で大気の虚を補い、鉄さび、生地黄で鎮肝、生血、涼血すると、脳をただ理す薬を使わなくても脳は自ずと理される。以上の数則はいずれも、探本究源の治法であるが、西洋医はこのことをわかっているだろうか？

私が著した書には、もともと衷中参西と名づけており、西洋医学の方法を採らないのではない。ただ現今の西洋医学を祭り上げて、欠点のない、万能の方法とするものとはまったく違う。私のみるところでは、西洋医学はまだ未熟である。

### 【訳注】

「鑑」は旧式書簡の書き出しで宛名の下につける文字で、いずれも「ご覧を願うの意味」である。

大鑑：一族や以前からの知り合いなど同輩のものに用いる。

台鑑：他人である同輩に対して用いる。

雅鑑：台鑑と同じ、特に女史にはこれを用いる。

道鑑：文化教育関係者に用いる。

鈞鑑：政財界などで実権を握っている人に用いる。

などと用い、いずれも敬意を表す。

### ◆ 宗弟相臣に返信する

冉雪峰の《温病鼠疫問題解決》の一書を拝受いたしました。仔細にこれを閲覽し、論じている温病および鼠疫はいずれも詳細で正確です。温病では詳細に脈の変化を論じ、さらに喉証、痘疹はいずれも温病に属すると述べたことは、まことに特段の見識です。鼠疫ではその毒の根源は腎から発し、結局は肺燥になりますが、陽燥・陰燥の違いがあるというのは、まことに的確です。《内经》を証拠として引用するに至って、また苦心して人々を教化していることが見てとれます。それについて寒熱篇の一、二の文をみると、もともと瘰癧が寒熱を発するに至るものをいうが、その毒が腎水から発すれば鼠瘻とし、即ち疫毒が腎水に発するのを鼠疫と名づけ、その理は相通じるとする。私が奉天〔遼寧省瀋陽の旧称〕にいた折に、かつて中国銀行の浙江出身の施蘭孫を治療した。鼠疫を患い、四肢が冷たく、脈は沈遅、舌は乾いて鏡のようにピカピカで、意識状態ははっきりしたり朦朧としたりで、<sup>うわごと</sup>譫言ばかり言っていた。熱が中に鬱し、同時に腎中の真陰が上達できていないと知り、《医学衷中参西録》の白虎加人参以山薬代粳米湯とし、さらに知母を玄参に置き換えた（玄参はただ補腎するだけでなく、中心が白く空疎で、味甘が苦に勝り、さらに肺臓を清補する要薬である）。1剤で手が冷えなくなり、脈がしっかりして、2剤で治癒した。冉君の鼠疫を読むと、「四肢が冷たく脈が沈遅なら熱は進行しており、厥が回復すれば脈が浮数になって熱が退く」と論じるのは、私が治療したものと符合している。冉君はまことに最近の医学界の逸材です。楚国〔湖北省〕に才子あり、まことにその通りである。

### ◆ <sup>ふかくこう</sup> 傅鶴皋に返信する

鶴皋先生<sup>がかん</sup>雅鑑〔ご覧ください〕

私はこれまでから、衛生の道は精神の育成にあり、精神をしっかり